

伊勢物語古註釈の研究

昭和二十九年三月二十日印刷
昭和二十九年三月三十日発行
伊勢物語古註釋の研究
定價金壹千円

著者 大津有一

発行者 金沢市大手町一番地
石川国文学会

代表者 窪田敏夫

金沢市高岡町九十番地

印刷者 明治印刷株式会社

代表者 飯尾龍三郎

金沢市片町五十六番地

発売所 宇都宮書店

凡 例

一、これは昭和二十八年度文部省研究成果刊行費補助金による出版である。

一、各註釈書の大体を示すために、框で囲んでその首尾を挙げた。

一、異体の字はなるべく普通の字体に改めたが、止むを得ないものはそのままにした。一二字を造つたものもある。

一、判読出来ない文字には□をあてて置いた。

一、漢文の引用や奥書には一応返点をつけてみた。或は誤読があるかも知れぬが、少しでも読んで置けば、それが訂正の端緒ともなるかと思ふからである。

一、振仮名は時として省略したところもあるが、その場名には必ず断つて置いた。

一、凡て引用文の体裁を変へたときには、その都度断つてある。

一、校正は金沢大学助手竹内昭君を煩はした。

伊勢物語古註釈の研究 目次

序 一

第一章 髓腦古註の時代 二

第一 在原滋春の伊勢物語髓腦 二

第二 長能道済の朱雀院髓腦 三

第三 源経信と和歌知頭集 四

第四 藤原基俊の悦目抄と伊勢物語極秘 五

第五 髓腦に見られる勢語の解釈 八

第六 六条藤家の註釈 八

第七 藤原教長の所註 九

第八 藤原家隆の註釈 九

第九 藤原定家の勘物 九

第二〇 十巻の抄とは何か 一〇

第二一 知頭集の末書 一〇

目次

第二 藤原為家の講釈	一三〇
第三 弘安五年の伊勢物語抄	一三六
第四 藤原為氏の註釈	一四〇
第五 古註とは何か	一四二
第六 伊勢物語註と伊勢物語塗籠抄	一四八
第七 伊勢物語口決	一五五
第八 毘沙門堂本古今集註中の勢語の解釈	一五七
第九 冷泉為秀の註釈	一六二
第二〇 今川了俊の講釈	一六三
第二一 冷泉持為と伊勢物語抄	一六三
第二二 正徹の註釈	一六六
第二三 伊勢物語難義註と伊勢物語祕注事	一七三
第二四 伊勢物語次第条々之事	一七九
第二五 延徳二年の祕註	一八一
第二六 堯孝の講釈	一八五

第二章 旧註の時代……………一八

第一 一条兼良と伊勢物語愚見抄……………一八

第二 東常縁の註釈……………一九

第三 宗祇と山口記その他……………二〇

第四 牡丹花肖柏と伊勢物語肖聞抄……………二六

第五 宗長抄と宗欽聞書……………二四

第六 堯憲と堯恵の講釈……………三五

第七 三条西実隆の講筵と註釈……………三六

第八 清原宣賢と伊勢物語惟清抄……………三七

第九 宗碩の講釈……………二九

第一〇 伊勢物語切紙……………二八

第一 伊勢物語聞書……………二七

第二 大永三年の伊勢物語聞書……………二九

第三 堯慶講釈の聞書……………二九

第四 経厚の講釈と伊勢物語聞書……………二九

目次

四

第五 愚見肖聞併記の註釈	三九
第一六 伊勢物語注本	三〇三
第一七 三条西公条の註	三〇四
第一八 天文十六年の伊勢物語註	三二五
第十九 詞 顯 抄	三二九
第二〇 伊勢物語恵雲院抄	三三一
第二一 大覚寺准后義俊抄	三三三
第二二 聖護院准后道増抄	三三三
第二三 九条禪通の九条禪閣抄	三三四
第二四 紹巴抄は種々あるか	三三三
第二五 伊勢物語忍摺抄	三三四
第二六 伊勢物語抄について	三四九
第二七 種々の伊勢物語聞書	三五六
第二八 三条西実枝と三光院抄	三六七
第二九 諸註集成の流行	三七三

第三〇	伊勢物語当流抄	三六七
第三一	細川幽斎と伊勢物語闕疑抄	三九〇
第三二	中院通勝と伊勢物語抄	四〇一
第三三	慶長七年の聞書	四〇七
第三四	伊勢物語嬰児抄	四〇八
第三五	後陽成院の伊勢物語愚案抄	四二三
第三六	三条西実条の講釈	四三六
第三七	烏丸光広と伊勢物語器水抄	四三八
第三八	中院通村の講釈	四三七
第三九	松永貞徳とその聞書	四四〇
第四〇	伊勢物語寡聞抄	四四二
第四一	一華堂乗阿と伊勢物語新註	四四五
第四二	切臨の伊勢物語集註	四四九
第四三	浅井了意の伊勢物語抒海	四五二
第四四	後水尾院の講釈と聞書	四六三

目次

六

第四五	加藤盤斎の勢語註釈	四九八
第四六	北村季吟の伊勢物語拾穂抄	五〇八
第四七	山岡元隣の伊勢物語言余抄	五一〇
第四八	高田宗賢の伊勢物語秘訣抄	五一二
第四九	後西院の講釈	五一六
第五〇	靈元院の奥尽御抄	五一九
第五一	伊勢物語裏説	五二三
第五二	作者不明の註釈	五二五
第五三	頭書伊勢物語抄	五二七
第五四	伊勢物語増選抄	五三〇
第五五	伊勢物語積	五三二
第五六	伊勢物語秘抄	五三四
第五七	伊勢物語聞書	五三五
第五八	伊勢物語演義	五三六
第五九	伊勢物語の註	五三七

第三章 新註の時代……………五九

第一 下河辺長流の伊勢物語講釈……………五九

第二 戸田茂睡の伊勢物語雑談……………五九

第三 上野図書館蔵伊勢物語日脚……………五〇

第四 契沖の勢語臆断……………五四

第五 伊達吉村の書入……………五三

第六 元祿十四年の講釈聞書……………五四

第七 中院家旧蔵の勢語註釈……………五六

第八 伊勢物語不審覚書……………六一

第九 伊勢物語の諸抄抜書……………五三

第一〇 今井似閑の万葉緯卷十三……………五四

第一一 享保四年の伊勢物語祕註……………五六

第一二 宝永享保の書入……………五七

第一三 荷田春満と伊勢物語童子問……………五九

第一四 伊勢物語童子問修刪……………五四

第一五	杉浦国頭の伊勢物語講義抄	五七六
第一六	辻経定の伊勢物語清渚抄	五七六
第一七	宮中に於ける伊勢物語伝授	五八一
第一八	岨山春幸の浮橋抄と章甫抄	五八七
第一九	五井純禎の勢語通	五九三
第二〇	加藤景範の勢語通註	五九五
第二一	高宮環中の伊勢物語審註	五九八
第二二	伊勢物語私抄	六〇一
第二三	伊勢貞丈の勢語臆断別勘	六〇三
第二四	伊勢物語拾穂再註	六〇四
第二五	賀茂真淵の伊勢物語古意その他	六〇六
第二六	上田秋成のよしやあしや	六一九
第二七	加藤美樹の伊勢物語注解	六二〇
第二八	田安宗武の伊勢物語註	六二四
第二九	建部綾足の伊勢物語古意追考	六三六

第三〇	彰考館藏真名伊勢物語の書入	六七
第三一	興隆の伊勢物語口訣抄	六三八
第三二	谷川士清の旧本伊勢物語考	六三九
第三三	加茂季鷹の伊勢物語傍註	六三〇
第三四	本居宣長の玉勝間	六三一
第三五	斎藤彦麿の勢語図説抄	六三三
第三六	海量の伊勢物語新考	六三四
第三七	伴信友の伊勢物語難語考	六三五
第三八	高井宣風の伊勢物語残考	六三六
第三九	中井履軒の雕題伊勢物語	六三八
第四〇	屋代弘賢の参考伊勢物語	六三九
第四一	立綱の伊勢物語昨非抄	六四〇
第四二	藤井高尙の伊勢物語新釈	六四三
第四三	橘守部の伊勢物語箋	六四三
第四四	富士谷御杖の伊勢物語燈	六四六

目次

10

第四五	清水浜臣の伊勢物語添註	六四七
第四六	勢語古義	六四九
第四七	勢語得意鈔	六五〇
第四八	石原正明の勢語章句	六五〇
第五〇	平田篤胤の伊勢物語梓弓	六五一
第五一	磯田平庵の伊勢物語書入	六五三
第五二	松田直兄の伊勢物語余言	六五三
第五三	高橋殘夢の伊勢物語初冠	六五四
第五四	田中躬之の註釈	六五五
第五五	山下清臣の勢語密義	六五七
第五六	飛鳥井雅久の講釈	六五八
第五七	五十嵐篤好の伊勢物語披雲	六六〇
第五八	江沢講修の伊勢物語索萍抄	六六三
第五九	伊勢物語抄	六六三
第六〇	伊勢語首抄	六六四

第六一	伊語類字抄	六五
第六二	正宗直胤の伊勢物語書入	六六
第六三	吉岡信之の伊勢物語講義	六六
結語		六七

序 説

- ◇ 研究史の資料
- ◇ きつの解釈
- ◇ 奥書は信用出来るか
- ◇ 比較について
- ◇ 時代区分

昭和九年の春であつた。私は国語と国文学の四月特別号に、それは十週年記念日本文学研究史上世編と銘うたれてゐたが、中世に於ける伊勢物語の研究といふ題を掲げて、小さい研究史を書いた。原稿八十枚程度のものであつたから、北村季吟の伊勢物語拾穂抄で筆を止めねばならなかつたが、その結びで、私もそのうちにもつと詳細なものを書きたいと思つてゐる旨を表明した。これは当時抱いてゐた希望をそのまま述べたわけであつたが、いはば一種の公約とでも云へる性質のものであつた。それ以来戦争中の数年間に亘る空白はあつたけれど、伊勢物語研究史の問題はいつも念頭を離れたことはなかつた。勢語諸伝本の調査にしろ、註釈書の整理にしろ、日記記録の渉獵にしろ、努めて怠らなかつた積りである。第二次世界大戦の末期、サイパンの失陥以後の我国は空襲によつて甚大な被害を受けた。古書の失はれたものはどれだけであつたか知れない。ところが戦後の経済変動の影響を受けて、従来学者の眼に触れたこともなかつた古写本が幾多市場に現れて、私達を驚かせたのである。伊勢物語の伝本でも、武田祐吉博士によつて紹介された泉州本以後、昭和二十三年十月刊行の図書寮典籍解題や、昭和二十四年五月の国語と国文学の田中宗作氏の谷森本伊勢物語についてによつて知られ、鈴木知太郎氏によつて昭和二十七年十一月活字にして古典文庫に改められた谷森本、一誠堂書店に出た伝為相筆本伊勢物語、書肆弘文荘から天理図書館に入つた伝為家筆本伊勢物語など珍しい本の出現をみた。殊に後の二本は何れも十五万円といふ売価を付けられてゐたものである。その他宇土細川家の旧蔵で、今は九州大学図書館の所有となつた伝為家

筆本、昭和二十五年十二月の高島屋の和洋古書大即売展に出品された伝為家筆本、昭和二十六年十月の白木屋の古書展の伝慈鎮筆本、伝良経筆本、昭和二十七年七月の弘文莊待賈書目所載の伝津守国冬筆本など、鎌倉時代の書写に係るかと思せられる本が相ついで出て来た。以上の外にも尙一二眼に触れた。室町以降の古写本に至つては、随分の数に上るのである。これらが何れも伊勢物語研究史の重要な資料であることは今更云ふまでもあるまい。本文校定の変遷や本文の伝来史を探究する上で、種々の新事実を教へてくれるのである。特に前記の泉州本・谷森本・伝為相筆本・伝為家筆本は、青谿書屋旧蔵の伝為氏筆本伊勢物語と共に、所謂異本伊勢物語として興味をひくものがある。

日記記録の類が研究史の資料として大切なものの一であることは、今更改めて説く必要もあるまい。故和田英松博士の皇室御撰之研究などには、日記類が十分に活用されてゐた。昭和二十八年一月発行した金沢大学法文学部論集文学篇の中で、私は日記記録の上から見た伊勢物語の研究といふ一文を草して、定家の日記明月記や飛鳥井雅有の日記嵯峨の通路などは普く人々の知るところだから別として、室町時代・江戸時代の日記を取上げて、それらが研究者の伝記とか、諸本の書写とか、講釈の日時や聞書の成立など、研究史上の種々の問題に対してかなり正確な指針を与へて呉れることを説いて置いた。そしてそれと共に、講釈や伝授についての時日や其間の事情を明かにしてくれる反面に、講義や伝授の内容に殆んど立入つてゐないこと、闕けてゐる部分があつたり、書いてないことが多かつたりして、研究史の資料としては必ずしも第一に推されるべきものでないことなども記した。史籍年表は座右に置いて何年何月の日記にはどんなものが現存してゐるか、調査に甚だ便利ではあるが、秘庫にあつて容易にみられなかつたり、渉獵しても所期の効果が得られなかつたりすることも勿論多い。

研究史の資料として、中心になるのは何と云つても註釈書である。私も従来最も力を致したのは古註釈の蒐集と整理であつた。国文学の作品の中でも古来註釈の数の多いものとして、万葉集と古今集、伊勢物語と源氏物語がよく挙げられ